

日本人英語学習者の発話における
サイレントポーズ・フィラーが
流暢さの評価に与える影響

野口 富美恵

Effect of Silent Pauses and Fillers on
Native Speaker Evaluations

NOGUCHI Fumie

This paper examines whether silent pauses of Japanese EFL learners in spontaneous speech affect perceived fluency by native-speaker judges and whether use of fillers, such as “um”, “well”, “let me see”, or “I mean”¹, to replace silent pauses might result in an increase in perceived fluency. In the experiment, three samples of Japanese EFL learners’ speech were evaluated by native-speaker judges in terms of fluency, vocabulary, grammar, friendliness, and intelligence through an internet questionnaire. The results showed the long silent pauses lowered the evaluation, but no effect could be verified for fillers.

1 発話の前、あるいは発話と発話の間に挿入される言葉で、“um”, “well”のように特別に意味のないものと、“let me see”, “I mean”のように重要ではないが話者の意図を含むものがあるが、本稿では両者を区別せずフィラーとして扱う。

1. はじめに

英語学習者にとって、‘流暢’に話せるようになるという事は、学習目的の一つであろう。英語学習者が自身のスピーキング力を判断するために受けるテストに the Standard Speaking Test (SST) や the Phone Pass Test of Ordinate 等があげられるが、これらのテストの判定基準の中にも‘流暢さ’が含まれている。しかしながら、この‘流暢さ’に明確な定義があるわけではない。

Schmidt (1992) は、‘流暢さ’を注意や努力することなく“自動的に処理できる技能”と定義している。又、Goldman-Eisler (1968:90-92) は、リズムやポーズの取り方の継続的時間の様式が‘流暢さ’に起因するとしている。

Fillmore (1979:92f) は‘流暢さ’を次のように定義している。

(1) ポーズがほとんどなく、長い時間話す能力、(2) 首尾一貫して論理的、かつ意味的に密度の濃い文章を無駄なく話す能力、(3) 幅広い内容において、適正に話せる能力、(4) 言語使用において創造的かつ想像的である能力

このような研究者の定義に加えて、SSTの判断基準にあるように、‘流暢さ’をもっとも‘native-like’ (ネイティブスピーカーのような) な話し方と考える場合もある (アルクのスピーキングテスト)。しかし、‘native-like’ というのはあいまいな表現であると Lennon (1990) は指摘している。Lennon によると‘native-like’ というのは、ネイティブスピーカーのステレオタイプ、つまり、間違いがなく、様々な文法構造や語彙を適正に使用できるということを理想化した表現にすぎず、実際には、ネイティブスピーカーでも間違いを犯したり、文法構造や語彙が制限されている場合も多く、混乱を招きやすいとしている。Lennon は又、英語学習者のポーズの使用形態が‘流暢さ’の評価に関係があるとし、ポーズを削減することで‘流暢さ’の評価を上げることが出来る と指摘している (1990)。

以上のように‘流暢さ’というのは、学習者の到達目標でありながら、そのとらえ方は様々であり、非常にあいまいのものであるといえる。本研究では、(1) この‘流暢さ’の要素としてあげられているサイレントポーズ (沈黙)

は日本人の英語学習者の発話に多くみられるが、実際に‘流暢さ’の評価にどのような影響を与えるのか、(2) このサイレントポーズをフィラーと呼ばれるつなぎ言葉 (um, well, let me see, or I mean など) で置き換えた場合、その評価に変化があるか、という2点について調べてみた。

2. 先行研究

前述の Fillmore の‘流暢さ’の定義は他の研究者に頻繁に引用されている。例えば、Riazantseva (2001) は Fillmore の“ポーズをいれずに長く話す”という定義から、ロシア人英語学習者の発話のサイレントポーズの長さ、頻度、位置のいずれが最も‘流暢さ’の評価に関係するかを調査した。Riazantseva は、学習者の英語の熟達度が高いほど、サイレントポーズの長さがネイティブスピーカーのそれに近いことを発見した。また、サイレントポーズが短く、頻度が低いロシア人学習者の発話が、ネイティブスピーカーにより‘流暢’であると評価された。

Cucchiaroni (2000) は、英語を読む速さ、調音、サイレントポーズの長さ、頻度、サイレントポーズ長の平均、発話の長さ、フィラーの頻度などの計測と音声学者の‘流暢さ’の評価との間に関係があるかどうかを調査し、この結果、調音の速さとサイレントポーズの頻度の低さが、音声学者やスピーチセラピストの、より‘流暢’であるという評価に最も影響していると結論づけた。

Freed (1995:123-148) の研究では、フランス語のネイティブスピーカーである評価者が、フランス語を海外で学んだ学生と国内だけで学んだ学生の発話を聞いて、その‘流暢さ’において識別可能であるかを調査した。Freed は、中級以下の学習者では、1学期間海外で学んだ学習者の方が国内で学んだ学習者より‘流暢さ’の評価が高く、海外で学んだ学習者の発話には、発話量の多さ、速さ、サイレントポーズやつなぎ言葉の使用において、国内で学んだ学習者の発話との間に顕著な差が見られたと報告している。

Howell and Sackin (2001) は、被験者が発話途中にサイレントポーズを入れる度に赤信号で警告することによって、被験者のサイレントポーズの頻度の減

少、発話速度の増加が見られることを発見した。

以上のように英語学習の発話に対する‘流暢さ’の評価とサイレントポーズの長さや頻度がある程度関係すると判断出来る。そこで本研究では、日本人の英語学習者に多くみられるサイレントポーズが、ネイティブスピーカーの‘流暢さ’の評価に影響があるかどうかを調べてみた。

3. 調査

3.1 被験者

同一話者の発話の中で、サイレントポーズのあるものとそのポーズをフィラーで置き換えた2種類の発話サンプルで評価するのが理想である。しかし現実には長いサイレントポーズを使用する話者が、サイレントポーズの代わりに適切なフィラーを使用して発話することが難しいことが予備研究で確認されたため、条件の似た複数話者の発話サンプルを評価対象とした。都内の私立大学の学部生三人の発話をサンプルとして評価対象にした。発話サンプルAは、1年間オーストラリア留学の経験がある4年生の男子学生のもの、発話サンプルBは、同じくオーストラリアに1年間留学経験のある4年生の女子学生のもの、発話サンプルCは、1年間ニュージーランド留学経験のある2年生の女子学生のものである。結果的に3人とも留学経験がある学生の発話サンプルを評価対象とすることになったが、これは国内だけの学習者の発話に適切なフィラーの使用が見られず、本研究の目的の1つである、サイレントポーズを適切なフィラーで置き換えた場合の‘流暢さ’の評価の変化をみるが出来なかったためである。

3.2 アンケート

英語のネイティブスピーカーに‘流暢さ’の評価を依頼するため、アンケートを作成した。このアンケートには、評価者の性別、国籍、職業などの個人情報に関する項目と、‘流暢さ’、語彙、文法、親しみやすさ、知性に対する発話サンプルの評価に関する項目が含まれる（補填1）。このアンケートを筆者の

ホームページに掲載するとともに、2つの英語教師のグループに、インターネット (web) を利用したアンケートへの協力を依頼した。

3.3 評価者

The Japan Association for Language Teaching (JALT) の203人の会員と English Teachers in Japan (ETJ) のメールグループにそれぞれアンケート協力依頼を送付した。回答者がこの両グループに重複して所属している可能性が非常に高いので、それぞれのグループからどの程度アンケートを回収できたかを確認する事は難しいが、全体として25%以上回収された。54人から回答があり、うち36人が男性、18人が女性であった。国籍はアメリカ人27人、イギリス人14人、カナダ人8人、オーストラリア人2人、ニュージーランド人1人、アイルランド人1人、アルゼンチン人1人となり、全員英語教師であり、2人を除く52人が現在、種々の年齢層の日本人に英語を教えている。

3.4 手順

被験者には、その通常の発話形態が変わらないように配慮し、本研究の目的は、‘流暢さ’の評価を決定付ける要因をさぐることであるという一般的な表現で説明した。実験では、筆者があらかじめ準備したテーマ (補填2) の中から、5人の被験者 (後に3人に選定) に、自身が選んだ異なるテーマについて2回発話をするよう依頼した。これらのテーマはやや問題提議の多いもので、被験者の発話に際し、サイレントポーズやフィラーの頻出を想定して準備した。[Shriberg (2001:153-156) and Oliveir (2002:541f)]

被験者の最初の発話後、被験者自身にその発話を聞かせ、自身の発話形態、特にサイレントポーズについて気付きを促した。2度目の発話の前に、被験者に「um, well, let me see, I mean」等のフィラーが書かれた用紙を提示し、サイレントポーズの代わりに意識してこれらのフィラーを使用するよう依頼した。2度目の発話時には、筆者がサイレントポーズを確認した際、フィラーが書かれた用紙を被験者に提示し、サイレントポーズをフィラーで置き換えるよう促

した。この5人の被験者のうち、比較的 naturally フィラーが使用できる男子学生が“これからの学校の先生のあるべき姿（補填2）”というテーマで話をした（サンプルA）。さらに、同テーマについて話した女子学生に、長いサイレントポーズを使用した発話形態がみられた（サンプルB）。この2人の発話がサイレントポーズとフィラーにおいて好対照であると判断したため、アンケート調査の発話サンプルとして採用することを決めた。サイレントポーズおよびフィラーの使用形態において、ネイティブに近い発話を求めて、同一テーマについて、さらに5つの発話サンプルを採取し、2年生の女子学生の発話とその自然さにおいてこの目的に合致したためサンプルCとして採用した。それぞれ発話形態の特徴である、フィラー、サイレントポーズ、この両要素において自然な発話形態が際立つよう音声ソフトで編集した後、これらの発話サンプルをアンケートとともにホームページに掲載し、アクセス可能にした。これらの発話サンプルは、すべて書き起こし、その発話長、速度、サイレントポーズの長さ（Freedの研究から0.4秒以上をサイレントポーズとして採用）、頻度、フィラーの長さ、頻度、発話におけるサイレントポーズ、フィラーの割合などを算出した。

4. 結果と考察

評価者のアンケートに対する回答という主観的データと、実際の発話から算出した計測データという2種類のデータから、本研究の目的である‘流暢さ’の評価にサイレントポーズやフィラーがどの程度影響を及ぼすかを検討した。

4.1 ‘流暢さ’の評価

評価者54人のそれぞれのサンプルに対する‘流暢さ’の評価は図1に示したとおりである。サンプルCをもっとも‘流暢’であると評価した評価者は32人（59.26%）、サンプルAは23人（42.59%）、サンプルBは1人（1.85%）となり、それぞれの‘流暢さ’の評価順位はC > A > Bである。

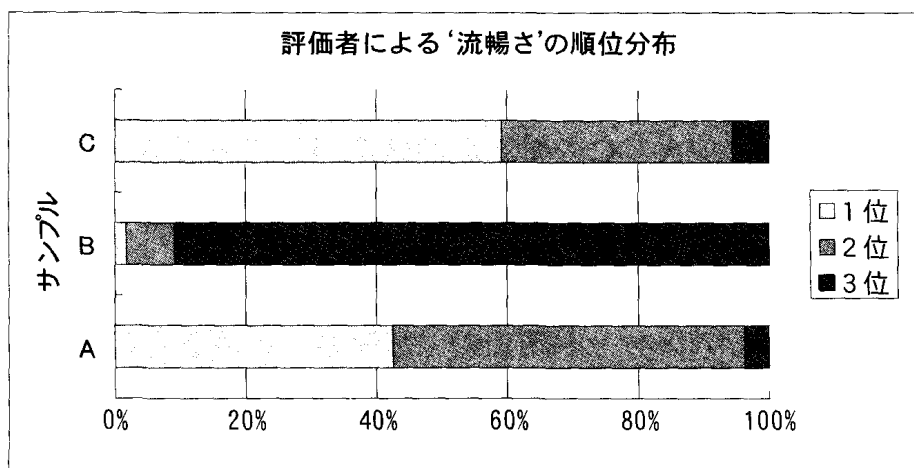


図1 評価者による『流暢さ』の順位分布

4.2 発話サンプルの統計的特徴

サンプルの発話はすべて書き起こした。それぞれに関する計測データは表1の通りである。

表1 発話サンプルの計測データ

	A	B	C
全発話長 (秒)	91.92	96.52	58.56
サイレントポーズ、フィラーを除いた発話長 (秒)	61.86	46.34	47.92
フィラーを除いた単語数	143.00	75.00	140.00
サイレントポーズの長さ (≥0.4 秒)	9.23	49.00	1.98
サイレントポーズの頻度 (≥0.4秒)	16.00	27.00	4.00
フィラーの長さ (秒)	15.49	0.48	0.61
発話速度 (単語数/秒) *	1.56	0.78	2.39
サイレントポーズ、フィラーを除いた発話の平均速度 (単語数/秒) **	2.31	1.62	2.92
発話比率 (%)***	67.30	48.01	81.83
サイレントポーズ比率 (≥0.4 秒) (%)	10.04	50.77	3.38
フィラー (%)	16.85	0.50	1.05

* 発話速度= 単語数/全発話長

** サイレントポーズ、フィラーを除いた発話の平均速度= 単語数/サイレントポーズ、フィラーを除いた発話長

***発話比率= サイレントポーズ、フィラーを除いた発話長/全発話長

表1より、サンプルBのサイレントポーズは顕著に長く、フィラーやサイレントポーズを除いた発話の平均速度は、サンプルA、Bに比べてきわめて遅いことがわかる。サンプルAとCの単語数はほぼ同じであるが、サンプルCの発話速度はAのものより速い。サンプルAのフィラーは未編集のまま残し、サンプルBとCのフィラーはサンプルAとの違いを際立たせるため削除しているが、フィラーと後で述べるアンケート調査の‘流暢さ’の評価との間に顕著な関係は確認されなかった。サンプルCの発話率は80%を超えており、フィラーやサイレントポーズの発話全体に対する割合が非常に低い。このサンプルCの発話率の高さと速度の速さが、アンケート調査のもっとも‘流暢である’という評価と関係が高く、サンプルBの速度の遅さとサイレントポーズの長さが、‘流暢さ’の評価を下げたと推定される。このような客観的データから、速度とサイレントポーズの長さおよび頻度が、‘流暢な’発話を特徴付ける重要な要因であると考えられる。評価者から直接的な指摘はなかったが、サンプルCの発話の特徴に、フレーズ（句）を0.4秒以上のサイレントポーズやフィラーで中断する事なく、一息で話すことが挙げられる。これはポーズ間の発話の平均長が長ければ、‘流暢さ’の評価が上がるという Towell et al. (1996) の指摘と関係するかもしれないが、この点については、今後の研究課題としたい。

4.3 ‘流暢さ’の評価と他要素の関係

アンケートでは、‘流暢さ’の評価に影響を与えるうる他の要素を調べる目的で、語彙、文法、親しみやすさ、知性のそれぞれの項目についても評価を依頼した。これらの項目とサンプルA、B、Cそれぞれに対する‘流暢さ’の評価との関係は図2のようになる。

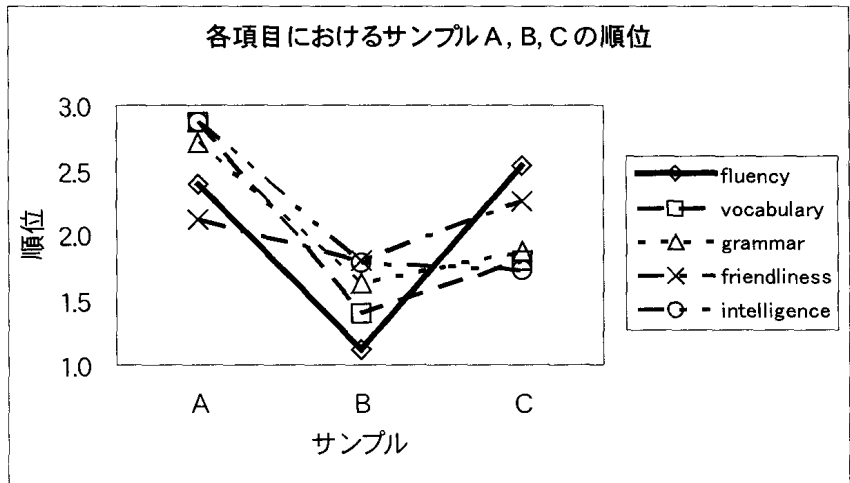


図2 各項目におけるサンプル A, B, C の順位

fluency 流暢さ、vocabulary 語彙、 grammar 文法、 friendliness 親しみやすさ、intelligence 知性

サンプルCは流暢さと親しみやすさにおいてサンプルAよりも高く評価されているが、語彙と文法においてはサンプルAに対する評価の方が高い。このことから、サンプルCに対するもっとも‘流暢’であるという評価は、その語彙の広さや文法の正確さではなく、音声的特徴や速度、サイレントポーズ、フィラーの自然さに関係があると考えられる。評価者の一人は、サンプルAとサンプルCの発話の特徴を「サンプルCはサンプルAよりコミュニカティブな運用能力を示し、サンプルAは、言語運用能力において優れている」と的確に表現している。

4.3.1 語彙

語彙については、54人の評価者の内47人（87%）が、サンプルAに1位の評価をしている（表2）。

サンプルCの“piss me off”という口語表現に否定的な評価もみられた。これらの評価者は、この表現が攻撃的で、あらたまった会話などで使用することは適切でないとコメントしている。しかし、発話依頼の段階では、話者ができるだけリラックスして発話出来るよう配慮したので、サンプルCの話者が、これをあらたまった機会ととらえていたかどうか不明である。

表2 語彙の順位

語彙の順位	サンプル		
	A	B	C
1 位	47	2	6
2 位	7	17	31
3 位	0	35	17
合 計	54	54	54
重付評価値	2.90	1.39	1.80

サンプルAがもっとも優れていると答えた評価者の多くが、その理由として、サンプルAの話者は他の2人に比べて、より高度な単語を使用し、自分の意見を的確に表現する語彙を備えていると説明している。

語彙におけるサンプルAとサンプルCの順位は、‘流暢さ’の順位とは逆であるが、サンプルAの‘流暢さ’がもっとも優れているとした評価者の大半は、サンプルAの語彙がもっとも優れていると評価しており、評価者の‘流暢さ’の定義と語彙の評価に関係があると思われる。

4.3.2 文法

文法に関する評価は、サンプルAが1位、Cが2位、Bが3位となった（表3）。

表3 文法の順位

語彙の順位	サンプル		
	A	B	C
1 位	42	8	9
2 位	8	18	29
3 位	4	28	16
合 計	54	54	54
重付評価値	2.70	1.63	1.87

サンプルAの文法的間違いはマイナーなもので、文の長さ、人称、数、格などの一致、従属節の使用などにおいてより優れていると評価された。評価者全員が英語教師ということ を考慮すると、教室内では、語彙同様、文法も‘流暢さ’の評価と直接的に関係があると考えられる。

4.3.3. 親しみやすさ

親しみやすさに対する評価者の反応はさまざまであったが、サンプルA, B, Cに対する評価は他の項目ほど差がでなかった(表4)。

表4 親しみやすさの評価

語彙の順位	サンプル		
	A	B	C
1 位	18	12	28
2 位	24	19	12
3 位	12	23	14
合計	54	54	54
重付評価値	2.11	1.80	2.26

親しみやすさという項目は、言語的要素以外に‘流暢さ’の評価に影響を与える要素があるかどうかを探す目的でアンケートに設けられたが、評価者の中には、親しみやすさが‘流暢さ’の評価になぜ関係があるのかという戸惑いがみられた。

サンプルCがもっとも親しみやすいと評価した評価者は、その理由として声の調子、イントネーション、フィラーの自然な使用などをあげている。サンプルCの話者は、口語表現の使用が自然でコミュニケーション能力がより優れていると判断した評価者と、その口語表現が攻撃的で不愉快だと感じた評価者にわかれた。会話を否定的な態度から始めたサンプルCの話者に対し、肯定的な態度で話題を進めたサンプルAの方が親しみやすいという評価もあり、親しみやすさは、会話の話題に対する話者の姿勢にも関連があると思われる。また、

サンプルAの聞き取りにくい発音と比較して、サンプルCは理解しやすく親しみやすいという評価があり、コミュニケーション能力の高さが‘流暢さ’だけでなく、親しみやすさの評価にも影響すると考えられるが、この点についても、今後さらに調査を行う必要がある。

4.3.4 知性

知性に関する評価順位は、語彙や文法の順位と同様の結果となった。サンプルAに対する評価がサンプルB、Cに比べて顕著に優れていた（表5）。しかし、知性と語彙や文法の評価順位、または知性と‘流暢さ’の評価順位の間に関係は認められなかった。

表5 知性の順位

語彙の順位	サンプル		
	A	B	C
1 位	48	10	6
2 位	5	22	27
3 位	1	22	21
合計	54	54	54
重付評価値	2.87	1.78	1.72

ある評価者は、自分の考えをどのように構成して表現するかは個人の経験や情報に依存し、これらが知性の評価の要因であると指摘している。

サンプルAの論理的発話の展開は、サンプルAの‘流暢さ’の評価に影響したと考えられるが、サンプルCに対する評価者の否定的な反応は、サンプルCの‘流暢さ’の評価を下げていない。評価者の一人は、‘流暢な’発話により知性を感じると指摘しているが、それは知性が‘流暢さ’の結果として評価されたのであって、‘流暢さ’の原因と判断されたわけではない。

5. 結論

‘流暢さ’を定義づけることは容易ではなく、どうすれば‘流暢に’話せるようになるかという問題に簡単な答えはないが、本研究から、長いサイレントポーズは‘流暢さ’の評価を下げる要因となることが確認された。また、発話の計測データからは、速度が‘流暢さ’の評価に関係が深いことも明らかになった。

フィルターの使用に関しては、長いサイレントポーズよりは良い評価が得られたが、‘流暢さ’の評価に影響を与える要因であるかどうかは実証できなかった。今後さらに、評価者の性別、国籍が評価にどのような影響を与えるか、また、評価者が英語教師でなかった場合、‘流暢さ’の評価順位に変化があるかどうかなどを調査していく必要があるが、教室環境においては、英語学習者のサイレントポーズを削減し、フィルターの適切な使用を指導していく事により、学習者の内在的な発話能力を最大限に活かし、‘流暢さ’の評価を向上させていくことが可能であると考えられる。

参考文献

- ALC no Speaking Test. ALC. Available URL:<http://www.alc.co.jp/edusys/teseval.htm>
- Cucchiaroni, Catia, Helmer Strik, & Lou Boves (2000). “Quantitative Assessment of Second Language Learners’ Fluency by Means of Automatic Speech Recognition Technology.” *Journal of Acoustical Society of America* 107: 989-999.
- Fillmore, Charles J., Daniel Kempler, & William S-Y. Wang (ed.) (1979). *Individual Differences in Language Ability and Language Behavior*. New York: Academic Press.
- Freed, Barbara F. (1995). *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context*. Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Goldman-Eisler F. (1968). *Psycholinguistics: Experiments in Spontaneous Speech*. New York: Academic Press.

- Howell, Peter & Stevie Sakin (2001). "Function Word Repetitions Emerge When Speakers Are Operantly Conditioned to Reduce Frequency of Silent Pauses." *Journal of Psycholinguistic Research* 30: 457-548.
- Lennon, Paul (1990). "Investigating Fluency in EFL: A Quantitative Approach." *Language Learning* 40(3): 387-417.
- Oliveira, Miguel (2002). "Pausing Strategies as Means of Information Processing in Spontaneous Narratives." In B. Bel & L. Marlien (eds.), *Proceedings of the 1st International Conference on Speech Prosody*. Aix-en-Provence: Laboratoire Parole et Langage. 539-542.
- PhonePass SET Score Report (2002). Ordinate Corporation. Available URL: http://eigotown.com/p_news/phonepass/indivi/result.html
- Schmidt, Richard (1992). "Psychological Mechanisms Underlying Second Language Fluency." *Studies in Second Language Acquisition* 14: 357-385.
- Shriberg, Elizabeth (2001). "To 'err' is Human: Ecology and Acoustics of Speech Disfluencies." *Journal of the International Phonetic Association* 31(1): 153-169.
- Towell, R., R. Hawkins, and N. Bazergui (1996). "The Development of Fluency in Advanced Learners of French." *Applied Linguistics* 17(1): 84-119.

補填

補填 1 : アンケート

Questionnaire

I . Please fill in your personal data. This information will remain confidential and will be used only for this thesis. Any reference to individuals will be only through pseudonym.

1. E-mail address (if possible):

2. Nationality:

3. Age:

4. Gender: male female

5. Occupation:

6. If you are an English teacher or instructor, do you teach students whose first language is Japanese? Yes No

7. If you answered 'Yes' for No.5, which age group do you teach?

Please check the age group you teach.

(You can check more than one from the following if necessary.)

pre-school students elementary school students

junior high school students high school students

college/university students adults

8. Do you live in Japan? Yes No

9. If you live in Japan, how long have you been in Japan?

years months

10. Do you speak Japanese? Yes No

II. Please click the following link to hear the speech samples, from A to C one by one, and then please go on to the questionnaire. As you listen, you will be asked to rank each sample in terms of fluency, vocabulary, grammar, and spontaneity. Each sample lasts about one minute.

[sample A](#) [sample B](#) [sample C](#)

1. Which speech sample is the most fluent in your opinion?

Please rank the samples from 1(= most fluent) to 3(= least fluent). Tie ranking will be acceptable, but please use both ends of the scale.

sample A sample B
sample C

Please check the factors which determined your ranking of fluency rate.

(You can check more than one from the following factors if necessary.)

speed pronunciation rhythm intonation
pause length pause frequency use of fillers
false starts and repetitions

other (please describe)

What does the term 'fluency' mean to you?

2. Which speech sample has the widest vocabulary range in your opinion?

Please rank the samples from 1(= widest) to 3(= least wide).

sample A	<input type="text" value="Select the rank"/>	sample B	<input type="text" value="Select the rank"/>
sample C	<input type="text" value="Select the rank"/>		

Please describe your main reasons for your decision.

3. Which speech sample is the most grammatically competent in your opinion?

Please rank the samples from 1(= most competent) to 3(= least competent).

sample A	<input type="text" value="Select the rank"/>	sample B	<input type="text" value="Select the rank"/>
sample C	<input type="text" value="Select the rank"/>		

Please describe your main reasons for this decision.

4. Which speech sample sounds most friendly in your opinion?

Please rank the samples from 1(= most friendly) to 3(= least friendly).

sample A	<input type="text" value="Select the rank"/>	sample B	<input type="text" value="Select the rank"/>
sample C	<input type="text" value="Select the rank"/>		

Please describe your main reasons for this decision.

5. Which speech sample sounds most intelligent in your opinion?

Please rank the samples from 1(= most intelligent) to 3(= least intelligent).

sample A	<input type="text" value="Select the rank"/>	sample B	<input type="text" value="Select the rank"/>
sample C	<input type="text" value="Select the rank"/>		

Please describe your main reasons for this decision.

III. Any comments on this questionnaire will be appreciated.



Thank you for your cooperation.

After you press the 'send' button, you will see a confirmation message.

Then please close the window to exit.

To send the questionnaire, please press ; 

To reset the questionnaire, please press ; 

補填2：発話のテーマ

- 1) 英語は小学校から正規科目として教えられるべきである
- 2) 大学の入試制度は変わるべきである
- 3) クローンはよい種を残すために必要である
- 4) ヒラリークリントンはアメリカの次期大統領になれる
- 5) がんなどの病気の場合告知は必要である
- 6) 安楽死は行われるべきではない
- 7) 将来ロボットは家事なども行えるほど普及する
- 8) 日本は世界で一番安全な国である
- 9) これからの学校の先生のあるべき姿
- 10) 国際社会の中で日本が果たすべき役割
- 11) 日本経済回復のための秘策
- 12) 地球環境を守るために出来ること
- 13) 流行と自分らしさについて
- 14) テレビゲームや暴力的なテレビ番組の青少年への影響
- 15) その他、あなたが今感じている問題